

都市とニュージーランド文学の生長

ジャネット・フレイムの「ギブソン先生と物置小屋」

イアン・リチャーズ

大阪市立大学大学院文学研究科英米言語文化教室

訳：山崎 弘行

大阪市立大学大学院文学研究科英米言語文化教室

20世紀文学のめざましい発展の一つは、ポストコロニアル文学と呼ばれる多くの新しい文学が発展途上国に生長したことであります。その最も成功した事例が、アメリカであります。アメリカでは、アメリカ文学という一群の文学が確立しておりまして、現在、これをポストコロニアリズムの観点から考察する専門家はほとんどおりません。しかし、アメリカ文学がこのようなポストコロニアルという自意識から脱出したのは、最近のことです。ソウル・ペロウの「オージ・マーチの冒険」という小説が出版された1953年になっても、批評家たちは、依然として、アメリカ小説の成立やアメリカの声の成立といったことを話題にする傾向がありました。アメリカは、文学をヨーロッパの植民地宗主国から借用して、そこに自分独自の登場人物、筋書き、主題を投入し、そうする過程で、この借用した文学に必要な変更を加える仕事を首尾よくやり遂げたのであります。

ニュージーランドは、英国の旧植民地のなかでは、最も若く、最も小さな国です。ニュージーランド文学は、20世紀に出現した現象ですから、短編小説がまず最初に発達し、最も発達した小説様式となったのも当然でしょう。

批評家たちは、ニュージーランドにおける短編小説好みに注目し、その原因を、出版事情が困難で、読者層が小さく同質的あることのせいにしています。『オックスフォードニュージーランド文学史』によりますと、「短編小説は、ニュージーランドでは特別な地位を得ており、長編小説以上に、コロニアル・ポストコロニアル文学の問題意識が表現されているジャンルであります。」通説では、ニュージーランドの短編小説の第一人者は、キャサリン・マンズフィールド（Kathrine Mansfield, 1888-1923）、フランク・サージュスン（Frank Sargeson, 1903-1982）、ジャネット・フレイム（Janet Frame, 1924-）で、彼らは全員、いわゆるモダニストとして分類できます。このことには、偶然が作用している面があります、と申しますのは、マンズフィールドの場合は、海外に出かけてニュージーランドの文学潮流から離れて先を行っていましたが、フレイムの場合は、短編小説に力を注いだのは初期のころで、後期の長編小説と短編小説はポストモダニズムを特徴としています。しかし、モダニズムは、モダニズムというのは、土地の言葉を詩趣に富んだ使い方をし、個人の心理を明らかにすることを目指した文学表現ですが、このモダニズムは、結果的に、ニュージーランドのような国の新しい文学が輸入して借用すべき優れたものであることが判明したことは事実であり、これは19世紀後半のロマンス小説の場合には見られなかった点です。

ニュージーランドの作家志望者たちは、たいてい、英国からの移民であり、ヨーロッパの都市文化から文学の概念を持ち込んだため、二つのほとんど相矛盾する活動を通して、ゼロ（無）から文学を創造する仕事に直面しました。一方で、作家志望者たちは、自分たちの新しい国をあるがままに見て、それを借用した文学形式の中で表現する手段を見つけなければなりませんでした。他方で、彼らは、自分たちの新しい国の本当の姿を見るために、借用した文学形式が運んできた文化のお荷物を拒否せねばなりませんでした。借用

した形式は、おのずからそれにふさわしい内容を書く傾向があります。批評家や評論家たちは、当然のことながら、これらの仕事のうちの最初のもの、すなわち、自国の現実を表現するための新しい方法の発見という仕事に注意を向けがちでした。彼らがニュージーランドの小説をほめるのは、それが海外で流行しているタイプの小説のニュージーランド版である場合に限られます。これは、「大目にみるべき地方主義」と言えます。しかし、ニュージーランドの作家たちにとって、もう一つの仕事、すなわち、文化のお荷物の拒否という仕事は、はるかにやっかいな関心事でした。その結果、新世代の作家たちが登場するたびに、自分たちこそ、英国文化の束縛から完全に自由になった最初の世代であり、ニュージーランドを明確に書くことができる最初の世代であると主張する傾向がありました。もっとも、そのように主張する彼らも、どこかの外国で大流行している形式と文体を用いて書いたわけではあります。このような混乱は、早い時期に出現しています。たとえば、最初の作家週間を記念して、1936年に、新しいニュージーランド文学に関する専門書が、ニュージーランド作家協会によって出版されました。1936年という年は、サージュソンの最初の短編集が出版され、ニュージーランド小説の伝統が始まった年です。ダガン (Maurice Duggan, 1922-75) やフレイムが登場するはるか前のことです。出版された時期が早かったために、ニュージーランド文学を概説したこの専門書は、サージュソンには言及していません。しかし、早くも、ニュージーランド作家たちのリアリズムを賞賛する一方で、彼らの文学が知的な洗練性に欠けることを批判し、「ニュージーランド社会はすべての海外植民地の中でもっとも英国的である」ために、ニュージーランド文学を生み出すことは困難であると書いています。

カリブ海系の作家ナイポール (Vidiadhar Surajprasad Naipaul, 1932-, 英領西インドのトリニダード出身) は、イングランド文学を植民地で読んだ

経験について書いた先鋭な論文の中で、次のように書いています。「本に書いてあるすべてが異質であった、すべてを適応作業にゆだねなければならなかった、たとえば、わたしの心に響き、わたしにとって価値があったイギリス小説が、すぐにイギリス的なものでなくなってしまった」と。植民地の新しい文化においては、自分の読むものを、ヨーロッパの植民地宗主国から切り離して、自分自身の環境へと適応させる過程が必要であり、この過程自体は楽しいことだが、そのことが、植民地作家たちの自分独自の文学を作り出す能力を墮落させるのだ」と。ナイポールは自分の思いを次のように語っています。「ディッケンズをトリニダードに適応させることはできるかもしれないが、私が知っているトリニダードの生活を本にすることは不可能に思われた。芸術家によって解釈されないかぎり風景は現実的なものとはなり得ないとするなら、作家によって書かれないかぎり社会も形をなさず、人を当惑させるように思われる。ディッケンズの事例によって、イギリスの作品をトリニダードに適応させる試みの愚かさを思い知らされて当惑したが、自分が見たことを書こうとすることにも当惑させられた。」ナイポールの場合、文学的な出発点となったトリニダードについての物語をその後見いだすことができましたので、いわば「空想（ファンタジー）の引き金」を引いてファンタジーを書くことはありませんでした。ただし、彼は見たことを書くことはできましたが、いつもイギリス文学との間の疎遠や、言葉と指示物との間の乖離を感じていました。というのは、ナイポールの場合、小説の素材についての体験のあまりにも多くのものが、最初は本を読んで学び、後になって実人生で体験したものだからです。ニュージーランドでは、地元の作家たちにモデルを提供したのはマンスフィールドとサージュソンの短編小説であり、とりわけサージュソンのそれでした。批評家の Vincent O'Sullivan は述べています。『少なくとも 1960 年代までは、「次のようなことを我々は早い時期

に学んだものだ、ニュージーランドで書かれるようになった短編小説には二つの作風が見られる、すなわちマンズフィールドの女性的な繊細さにみちた、中産階級的な上品な作風と、サージュソンの男性的で、労働者階級風の、気取りのない率直な作風である」と』マンズフィールドは子供の視点から繊細で表情豊かな短編小説を書き、サージュソンは労働者の視点から男臭い簡潔なスケッチを描きました。二人とも高度に詩的なモダニストで、多くの二流の模倣者を生み出しました。

ダガン は 1922 年に生まれ、フレイルム は 1924 年に生まれた作家で、マンズフィールドとサージュソンによって作られたばかりの新しい伝統に依拠していました。とくにサージュソンのニュージーランド社会にたいする敵対的態度、すなわち、反ピューリタンの、反ブルジョアの、反知識人的態度に影響されました。二人ともマンズフィールドとサージュソンを直接、模倣したわけではありませんが、モダニスト的象徴主義者であったダガンとフレイルムは、美しく作られた自己言及的な芸術作品に対する好みを示しています。二人とも、自分自身の声を発見する過程において、自分たちの文化的背景にあるイギリス的な要素を排除することが必要だと考えました。先輩のサージュソンおよびマンズフィールドと同じように、二人とも英国へ旅行しましたが、そのことが契機となり、それまでの彼らの体験が非イギリス的であったことに気づきました。後になって、ダガンは彼の経験の一部である地元の高校について強い不満を述べています。チューニスの白壁のこと、死にかけている奴隷のこと、解かれた方陣のことについて。全員が一斉に暗記にふけり、全員が、ぶらぶらしたり、うとうとしたり、ぶつぶつという英語の授業中には、愚かな暗記において復唱したのです。フレイルムは、子供時代にジョージ王朝風の詩をたくさん書いたにもかかわらず、彼女の初期の短編である「ギブソン先生と物置部屋」では、イギリス文学がかき立てる空想 (fantasies) を拒

否しています。1940年代に書かれたこの短編は、文学的声明書として読めません。新しい文学の書き手にとって、このような声明書は重要であります、なぜなら、彼らは自分自身の作品を創り出そうとしているばかりでなく、創り出した作品の読み方を決定することを試み、そうすることによって自分自身の読者を創りだそうと思っているからです。

フレイムの半生は、1983年から1985年にかけて出版されて好評を博した3巻本の自伝と、彼女を主題とする大当たりした映画を通して、ニュージーランドの人々に知れ渡っています。彼女は南島(South Island)出身の貧しい家庭の鉄道労働者の子として育ち、水難事故によって二人の姉を失い、20代に精神衰弱を患って精神病院に収容され、そこで精神分裂と誤診されました。このため、彼女は繰り返し電気ショック療法を受けるに至り、10年近くも院内に閉じ込められました。挙げ句の果てに、ロボトミー手術(前頭葉切除手術)を受けることになったのですが、最初の短編集が受賞したという知らせが入って、手術は中止されました。やがて、彼女は病院から解放され、サージュスン家の裏庭にあった小屋で暮らすようになり、そこで最初の長編小説を書きました。それからイギリスへ渡り、そこで特別の精神病理学的介護を受け、自分自身の人生を送ることができるようになりました。その結果、いくつかの長編小説と、三冊の短編集が出版されました。しかし、批評家たちが伝記上の誤謬を犯したため、長年にわたって彼女の作品は誤解されました。批評家たちは、作家フレイムと作品中の哀れなヒロインとを混同し、フレイムの詩的な表現は、精神の薄弱さを反映するものだ、物語をコントロールする力の欠如を反映するものだと批判したのです。2001年になっても、Michael Kingによって書かれたフレイムの伝記 *Wrestling with the Angel* を評した C. K. Stead は、次のように述べています。「フレイムは物語構成に強くないので、また、いくぶんきまぐれな性格なので、小説には構成上の矛盾があ

る。」と。実際には、フレイムの小説は、異例なほど有機的な物語構造を使用しており、また複雑な隠喩的イメージを使用していて、めったに正体を読者の前に現しません。こうしたことがあるにもかかわらず、映画に描かれた彼女の半生が一般受けしたこともあって、彼女はニュージーランドの国民的象徴になりました。不思議なことに、彼女はアウトサイダー的な立場にあつたにもかかわらず、ニュージーランド人口の大部分を占める体制順応的な中産階級の人々の人気をえました。フレイムの小説では中産階級が容赦なく攻撃されているわけですから、なおさら不思議です。批評家の Bruce King は、中産階級は、精神的に欲求不満を抱いている不安定な集団の典型であり、中流階級に対する攻撃は自分たちの価値観に合っていると見ているのだと述べていますが、あるていどこのような不思議な実情を説明してくれるかもしれません。

「ギブスン先生と物置部屋」はフレイムの典型的な初期の短編小説であると思われます。その文体は単純素朴さを装ったもので、小説の語り手が、かつての恩師に手紙を書いている 21 歳の学生であるため、一見したところ、著しく不適切に見えます。この文体には二つの特徴がありまして、句読点の欠如、および、洗練された言語表現と単純素朴な言語表現との奇妙な混交です。しかし、子供のときに偉い人だと思っていた人物に手紙を書くとき、多少の精神的退行が生じても異常ではありません。また、ニュージーランドのような若い国で執筆活動を開始する作家は、通常、自分の用いる材料、言語、形式にたいして、子供と同じ方法で取り組むものです。手紙を書くとき、この小説の語り手は自分の思い出に忠実であろうとして、それらを紙の上に再現しようとしています。すると、思い出は、句読点など無視して、思い出すままにあふれ出るのです。主題という点でも、洗練された言語表現と単純素朴なそれとの混交は適切だと思われます。なぜなら、そこには、文化的、文学的な

影響や洗練性を示唆するあらゆるものをふるい落として、より現実的で口語的な文学形式を見いだそうという狙いがこめられているからです。この小説の冒頭の段落で、語り手は自分の若い頃の作品をそれとなく話題にしています。学校で、彼女は週に一度、作文を書いてギブソン先生に見せなければなりませんでした。彼女は、当時書いた短い作文の例をいくつか提示したかと思うと、「私は当時ひどい嘘つきだった」と告げて、それらの作文の価値を否定します。いまや21歳の独立した大人なので、彼女は「真実」を語る必要を感じているのです。ニュージーランドが国家としてこれと同じような状況にあったことは偶然ではありません。たとえば、1940年にニュージーランドは、ワイタンギ条約 [1840年の北島のマオリ族との条約。この条約でニュージーランドが英国に併合される。] 締結以後の100年を記念して100年祭を挙行しました。さらに、語り手の作文に現れる風景描写もロマンス小説の特徴です。ロマンス小説は、サージユスンとModernismが登場する前の初期ニュージーランド小説の確立した形式だったのです。

作文の教科書から、ギブソン先生 (Miss Gibson) は、物置部屋へ入って少年時代に使ったものを見つける男に関する「ある種の文章 (エッセイ)」を選び、クラスの女の子たちに読んで聞かせます。もっとも、ニュージーランドの家にはこのような物置部屋はないのですが……。 「ある種の」という修飾語句は、作文の教科書と、授業を受けている女の子たちの精神の中に見られる、このエッセイの形式をめぐる基本的な混乱を表しています。つまり、ギブソン先生が選んだエッセイがフィクションなのか、それともノンフィクションなのかをめぐる混乱や、ひいては、このエッセイのもつ実人生との関係についての混乱を表しています。ギブソン先生がヨーロッパ中心の学問を表すのと同じように、物置部屋はヨーロッパの過去および伝統の貯蔵庫を表します。ヨーロッパ人の大人として、エッセイに登場するこの男性は長きに

わたる個人と国家の歴史を保持しています。これとは対照的に、授業を受けているニュージーランドの少女たちが保持しているのは、短い個人と国家の歴史です。ギブソン先生は、少女たちに、課題として、自分自身の物置部屋探検について作文を書くように指示します。この先生が考えているのは、モデルとして自分が読み聞かせたものを生徒に模倣させることです。文化の観点から言えば、このことは、新しい国の作家たちが、古い国の主題とスタイルを模倣した作品を作らなければならないことを示唆しています。彼らは、作品を読んでもくれる唯一の読者、すなわちギブソン先生のようなヨーロッパ中心主義者たちによって、模倣するように要求されるのです。さらに、新しい国の作家たちが作り出すのは基本的に模倣作品なので、それらはヨーロッパ的基準で評価されます。かくして、ギブソン先生は、生徒の書く作文について、最後まで書く必要がないほどよく知られた「どんな試験官もこんなにひどい作文は見たことがない云々」という紋切り型の不平を述べるようになります。しかし、ここには最初から次のような逆説が示唆されています。つまり、女の子たちの作文は強い規制を受ける定めになっていながら、彼女たちが書くものは、どんなものであれ、モデルに匹敵するほどよいものにはなり得ません。それらは必然的に模倣作品ですから。新興国の作家が書く作品についても事情は同じです。

語り手は、現実からますますかけ離れた空想的な言葉 (fantastic terms) で自分の家庭と生活を描写し始めます。物置部屋についてのエッセイに対する語り手の反応は、それを自分自身の生活に適應させて、空想の引き金として使用しようとするものでした。彼女は召使や庭師について語ります。この庭師はジプシーのバイオリン弾きと奇妙に重なるのですが、語り手の空想にとって、そんなことは問題ではありません。彼女は上流階級に属すると思われるF家族の子供たちが「あずまや」で演奏することについて語ります。今や

彼女は、一見したところ、一段と深く空想の世界に浸っているように見えます。しかしながら、フレイムの自伝で明らかになったように、この出来事は本当にあったのです。フレイム家の庭の奥には、あずまやが実際にありました。そして、子供たちは実際にそこで小規模の演奏会をしたのです。現実と空想の区別が語り手にはつかなかったのと同じように、フレイムはフィクションの要素とノンフィクションの要素を混ぜ合わせて、読者に物語の筋書を模倣する経験をさせようと試みているのです。語り手とは逆の立場にある読者はフィクションを読むことを期待するあまり、この物語の中のフィクションでない要素を誤って空想として読んでしまうのです。したがって、読者もまた、物置部屋についての「ある種のエッセー」の悪影響を受けて、墮落するのである。

物語の中間地点で、語り手は再び「自分は恐ろしい嘘つきだった」と述べます。この発言は、ギブスン先生と作文教科書という文化的権威によって取り決められたゲームに進んで興じたことに対する彼女自身の審判です。しかし、「恐ろしい」(awful) という単語は「悪い」(bad) という意味を表すことができると同時に「畏敬に満ちた」(filled with awe) という意味を表すことができます。「畏敬に満ちた」という意味は、生徒であった語り手の立場を表わしています。次に、語り手は、物置部屋について自分が書いた作文がどのようなものであったかを話します。彼女は、まず、作文の内容は先生の印象には残っていないであろうと言います。これは、文学作品としては失敗作であったことを暗に認めることです。小説の後半部の始まりは本質的に前半部のコピーです。前半部も後半部も、自分は嘘つきだったと語り手が述べる短い段落で始まります。それから、二つとも、誰かが物置部屋へ入って声を上げる段落へと続きます。次に、文化の墮落過程の事例を物語る三つの段落が続きます。最初の段落では、物置部屋にいる語り手が記憶違いを経験しま

す。彼女は、自分自身のまだ過去にはなっていない人生の時期へのありもしない郷愁を呼び起こし、これを *thou, thy, hast* のような古語を使って表現します。これは文学の墮落過程です。次の段落では、語り手は、自分が読んだ最初の本を見つけたと語ります。彼女は偽りの状況を創りだし、感動するのが当然のような場面を想像することにより当然のように「感動する」という仕事を自分に課します。これは想像力の墮落過程です。三つ目の段落では、「過去の事物」を彼女は見つけようとし始めます。彼女は、「三つのオパールがはめ込まれて」いる時計、魅力的ではあってもありそうもない時計に焦点を合わせ、次に、その時計を自分に与えてくれた伯母、'Great Aunt Mildred' という大層な名前と呼ばれる伯母についての、ますます空想的になった物語を構築します。語り手は *Great Aunt Mildred* が上流階級出身であるということ、ばかばかしいほどに誇張し、最後には、信憑性のある家族史ではなく、おとぎ話的なもので物語を終えています。このようにして語り手が現実をより魅力的な空想で置き換えたことは、すなわち、最初は個人の記憶にかかわる空想で、次に家族の過去についての空想で置き換えたことは、歴史感覚の墮落過程を表しています。

次の段落で、語り手は芸術の才能があると主張します。彼女は、6歳でシェイクスピアを読み、バッハをマスターしたと主張します。語り手にとって重要なことは、自分の才能がヨーロッパから輸入された芸術形式によって現れることであり、誰もが拍手して自分の演奏を讃えたと彼女は書きます。それから、彼女の作文がどのように評価されたが明らかにされます。それは20点満点中14点で、特に良いわけではないと評価されています。彼女はいまだにギブスン先生が自分の作文を正当に評価しなかったことに腹をたてており、これがギブスン先生へ彼女が手紙を書く理由だと分かります。物語の最後から2番目の段落において、語り手は本当の自分の姿を巧みにスケッチし

始めます。このことを、彼女は、空想は偽であったと認めることによって、そして、それを真実で置き換えることによって行います。彼女は裕福でも、早熟の天才でもなかった。パーティーでバッハを聴いて楽しむような芸術的雰囲気のある家庭の出身でもなかったのです。最後の段落では虚偽の空想を否定する作業を更に推し進め、空想を完全に洗い流します。段落最後の部分では語り手は何物も否定せずに、自分の家族を率直に描くことができるようになります。彼女は質素な家庭に育ち、そこで疎外感を味わうこともなく、単純な幸福を経験しました。若い国の子供として、彼女は自分の重荷になるような過去を持たず、重荷を持たないことを気にすることもありませんでした。地理的条件のために伝統の重荷から自由である感性には、完全に新しい想像的な領域を設定することができるという利点があります。そして、このことを理解することは一種の芸術的解放となります。そのために、語り手の家には物置部屋がなかったのです。

そうすると、「ギブスン先生と物置部屋」は、ヨーロッパの植民地宗主国の文学形式といっしょに入り込んできた文化のお荷物の悪影響から自由になるために、また、古い文化の否定から、新しいものを本当に探求する方向へと向かうために、作家が書かなければならなかったタイプの物語だということになります。この短編小説を書いたあと、フレームは長く生産的な作家生活に入り、1980年代には自伝も出版しました。「ギブスン先生と物置部屋」の出現以後30年以上たってから出版されたこの自伝が現れるまでは、一般の読者はこの小説で作者が密かに事実と空想を混ぜ合わせていたことを知りませんでした。このように、少なくとも、部分的には、フレームは「ギブスン先生と物置部屋」を書きながら、読者とではなく、自分自身とコミュニケーションを行っていたのです。このタイプの文学、すなわち自分を満足させるために書くというタイプの文学は、満足すべき読者が存在しない場合に出現します。

これは、ニュージーランドのような若い国における文学的声明書のもつ根本的な逆説なのです。それは作家が自分自身に送る、公的活動についてのメッセージなのです。